

鐫木清方文集

五
名所古跡

鐫木清方文集

五
名所古跡

白鳳社

鍋木清方文集 五 名所古跡

昭和五十四年二月二十五日第一刷發行

著者 鍋木清方 かぶら きよ かた

編者 山田肇

發行者 高橋謙

發行所 株式會社白鳳社

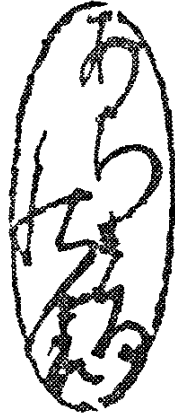
東京都千代田區神田神保町一―二〇
郵便番號 一〇一

電話番號 東京〇三二九一―七五七一
振替口座 東京八一九二二四一

印刷・製本 凸版印刷株式會社

定價 四、〇〇〇圓

コード番號 〇三七〇―二二〇五―六九〇六
落丁・亂丁本はお取り替へいたします。



鏑木清方文集

五 名所古跡

目次

I

東海道を下る	二
上方見物	六
櫻ヶ池	四
姫街道	四
道しるべ	五
旅と自動車	五
初旅	七

Ⅱ

東郊の思ひ出	………	五
探　　梅	………	七
江東の梅を思ふ	………	七
回想の江東	………	七
隅田川東岸	………	八
歴史のある顔	………	五
古　　跡	………	九

Ⅲ

蘆　の　芽	………	一〇
新江東圖説	………	二
一畫一文	………	三
地圖を彩る	………	四

IV

隅田川西岸	………	一四〇
小 本	………	一五五
寮住居	………	一六二
銀杏返し	………	一七〇
堀尾老人	………	一七七
馬道の師匠	………	一八五
銀座回想	………	一九六
失はれた築地川	………	一九九

V

川越道	………	二〇五
あるはずの瀧	………	二一四
塔の澤浴泉記	………	二二九

大文字	二七
筆捨松	三九
金澤八景	四〇
朝富士	四五
御殿場高原	五三

あとがき	編者 山田 肇	六一
------	---------	----

圖版目錄

I

大原寂光院(昭和五年三月寫生).....	九
駿河阿部川橋(同右).....	七
東招提寺南大門前(同右).....	三對向上
落柿舍(同右).....	同下

II

橋場の渡し(明治二十七年九月寫生).....	三
『柳圍蟲聲』(昭和十七年作).....	六對向

III

篠崎の蓮根(昭和二十八年九月寫生).....	二二
江戸川(『蘆の芽』昭和十三年六月刊).....	二五
葛西橋放水路河口(同右).....	一九
葛西二の江(同右).....	三
新川口(同右).....	二五
善養寺、星降り松、影向松(同右).....	二九

今井橋早春の不二（『蘆の芽』昭和十三年六月刊）…………… 一三

堀切小高園（同右）…………… 一三

下總行徳（同右）…………… 一七

遠々江佐久米（同右）…………… 一八

IV

石濱神明宮境内（明治三十年代前半寫生）…………… 一五

山谷にて（同右）…………… 一六對向上

千住鐵橋（同右）…………… 同下

V

栢木の秋海棠（昭和二十年九月寫生）…………… 二三

あるはずの瀧（『蘆の芽』昭和十三年六月刊）…………… 二七

能見堂跡金岡筆捨松（大正八年夏寫生）…………… 二四對向上

筆捨松折る（大正九年夏寫生）…………… 同下

『柳園蟲聲』はソウル國立中央博物館藏。

寫眞提供、小學館。

寫眞 大澤 一夫

I



東海道を下る

一

富士川を西へ下るのは今度が初めてである。私はよく旅嫌ひと誤られてゐるが、旅は決して嫌ひではない。ただ旅に要する交通機關の最も便利な、汽車に乗ることの嫌ひなため、十年餘りも殆ど旅らしい旅をしたことはない。

平宗盛は水鳥の羽音に驚いて、富士川を東へ渡らずに逃げて行つた。汽車が嫌ひで富士川を西へ渡らない私は、宗盛のことはあまり笑へた義理でないと自ら恥ぢてゐる。

それが今度、友人の平福、松岡二人が伊太利へ行くのに神戸から乗船することになつたので、東京驛で別れるのがあまり本意なさから、神戸まで見送らうといふ氣になつて、それが機縁となつての關西へ自動車の初旅、今頃初旅といふのも全く變なものだとは思ふが、繪畫や文字でのみ知つた土地を初めて踏む事の興味は、やはり初旅と呼ぶにふさはし

い若々しい心を己の内に見出す。

なるべくなら自動車にも多くは頼らずに、昔の人のしたやうに旅路を重ねて往つて見たのであるが、それでは二人の船出の間に合はない。急げるだけ急いで、それで道中一通りの印象だけはつかみたいし、二十日の朝東京を出て、その日は興津泊り、次の朝興津を發つて蒲郡泊り、次の日は名古屋、次が彦根、五日目に三條の大橋を渡れるやうにと豫定を立てた。

去年の暮押しつまつて、靜浦、修善寺、熱海と、やはり自動車を利用しての七日の旅をしたので、沼津までは未だ印象も新しい。戸塚、藤澤間の松並木道は、去年の夏も越したことがある。これからの行程の中にどんなよい松並木を見出すかも知れないが、戸塚の並木は一といつて二と下らぬものであらう。

他の並木にもかなり古木は多いが、兩側の土手がずつと低いか、さもないと土手のない、常の街路樹のやうになつてゐる。戸塚のは左右の土手が高くて、その上に百年以上の老樹が亭々とのびて枝を交はし、松の葉は深く茂つて空を見せないやうなところもある。

東海道を通つて、しみじみと日本なるかなと思はせるものは、富士山と松並木である。

若し一度海外へ行つた人が、日本へ歸つてこの街道を通るとしたら、富士山と松並木

は、善美を盡した歓迎の宴よりどんなにかれを楽しませるであらう。ダグラス夫妻があの素晴らしい歓迎を喜んだか、迷惑したかは私の興あつかり知らぬことだけれど、かれ等の來た時、富士が出なかつた、この松並木も通らなかつた、假に私がかれ等であつたとする、踏み潰されさうな歓迎と、富士と松並木とでは、どちらを取るかとなれば、てんで問題にならない。

都會の街路樹にはすずかけの木がよいと見えて、多く用ひられてゐる、植物園にはすずかけの木の立派なのがある。東京などはあれがよいかも知れぬ。併し、東海道がアスファルトになつて、松を伐つてすずかけの木を植ゑる時が來はしないか。

現に藤澤の遊行寺の前あたりでは、道路擴張工事をやつてゐる。あの道幅を通すとしたら、松は伐らねばならなくなつて來る。

若し東海道の道幅を大おほいにひろげなければならぬのなら、アスファルトの新道を松並木の外に設ければよい。而してあの得難い松並木は富士山の存する限り、日本の存する限り保たねばならぬものである。

繰返していふ。富士山と松並木とは、皇國日本の動きなき象徴であると。

二

この國に生を享けたわれわれの祖先、徳川三百年の長い間、歴史に親しい英雄、名君、文人、藝人の誰彼、急を赤穂に告ぐる早打ちの駕籠も、一本の矢立を媒なかだちに、今なほ世界的の生命を保つわが一立齋廣重も、私が今二十哩の速力で自動車走らせてゐるこの道を通つて往つたのだ。

この街道を往來する旅人が、富士を見ぬ日の旅はいかに侘びしかつたであらう。東京を出る時から暖かに晴れて、常に霽雪の富士を失はずに下つた快さは、初旅の幸先の恵まれたことを喜ばずにゐられない。八つ山で町内の人達に別れて下つた昔の旅人も、きつと私の今の心持で、千古變らぬこの靈峰の姿を仰いだことであらう。

富士の峰、箱根の山は雪に粧はれても、行く途に雪を見ようとは思つてゐなかつたが、宮の下を越ゆる頃から日蔭にむら消え残る雪、追々深くなつて、二子山麓を廻る頃は、一尺に餘り、漸く轍の跡をたどつて車を進めるやうだつた。

箱根から三島へ下りる山中、市の山、塚原などといふあたり、ゆくてに伊豆、駿河の海を見て巨松の並木、うねつた道、丘に家あり、枯木立、むら立つ杉、宛然玉堂先生の畫中